

# 社会福祉学と二元論

## —メタ・クリティークという概念装置—

丸岡 利則<sup>1</sup>

(2012年9月28日受付, 2012年12月18日受理)

Social welfare science and Dualism  
— The conceptual device of meta-critique —  
Toshinori MARUOKA

(Received: September 28, 2012, Accepted: December 18, 2012)

### 要 旨

社会福祉の全体像を説明するのは、容易ではない。それは、社会福祉を言語の網の目として見ることである。そして、そのときの全体像は、つねに曖昧なものと確実なものが混在し、かつ非常に複雑なかたちでしか与えられていない。いま社会福祉の世界が複雑なのは、全体としての意味がつかみにくいからである。

そのため本稿は、この複雑な意味を明らかにする方法を試みるのが目的である。そして、二元論というキーワードから、概念装置がもっている原理や体系に変換する機能を通して、社会福祉の全体像に至る道筋を概観するものである。

キーワード：概念装置, メタ・クリティーク, 二元論, キーワード, 交通整理

### Abstract

It is not easy to explain the perspective of the social welfare. It is to watch social welfare like the mesh of a net of language. And, this is because the perspective at that time is given only in form the thing which is certain that it is always vague coexists and is very complicated. The reason why the world of the social welfare is complicated is that it is hard to get a meaning as the whole now.

Therefore, it is a purpose in this paper to try the method of clarifying this complex meaning. And, through a function to convert into a principle and the system which a conceptual device has from keyword of the dualism, we survey a route to reach the perspective of the social welfare.

Key Word: Conceptual device, Meta-critique, Dualism, Keywords, Traffic control of concepts

#### 1. はじめに

社会福祉の全体像を説明するのは、容易ではない。なぜなら、それは、社会福祉について、言語の網の目として配置されたものを正確に見ること

であるが、そのときの全体像は、つねに曖昧なものと確実なものが混在し、なおかつ非常に複雑なかたちでしか与えられていないからである。

いま社会福祉の世界を複雑にしているのは、全

1 高知県立大学社会福祉学部社会福祉学科・教授・修士（社会福祉学）

Department of Social Welfare, Faculty of Social Welfare, University of Kochi, Professor (M.A.)

体としての意味がつかみにくい点である。おそらく意味不明な点が多いのは、ミスリーディングか、読み解けていないかのどちらかによるものだろう。そのため本稿は、このような複雑になった意味を明らかにすることが目的である。

そこでわれわれは、社会福祉の全体像<sup>1)</sup>をつかむために、概念世界の交通整理をしたいと考える。その方法は、メタ・クリティークという概念装置を用いながら、概念の「意味」を読み解くことである。この装置は、まず視点と文脈を明確に示す機能があり、さらに、その使命は、社会福祉の視点と文脈を変換<sup>2)</sup>することにある。

そして、全体像を描くために、テーマとして用意したのは、二元論というキーワードである。

## 2. 社会福祉の意味への問い

### (1) 意味を問うということ

社会福祉概念の意味を読み解く前に、まずは社会福祉の意味とは何かという問いから始めよう。本稿では、この意味を問うことと、それに答えることによって、社会福祉の全体像について、意味不明やミスリーディングを超えて、まったく新しい展望をもたらしたいと考える。

まず、社会福祉の意味を問うことが、研究上の本質的な可能性とつながることを確認したい。

1つは、この命題も含めて、キーワードとしての二元論は、あくまで研究上の問題であるということである。例えば、小林秀雄の「あらゆる思想は実生活から生れる。併し生れて育った思想が遂に実生活に訣別する時が来なかったならば、凡そ思想といふものに何んの力があるか」(小林1961:14)というセンテンスは、非常に示唆に富んでいる。

これを福祉の世界の実践に準えと、社会福祉学は、社会福祉の実践的な展望とは切り離せないと言える。社会福祉の現実への対応を欠く社会福祉学はない。しかし、それは、現実に対して直接的な有効性を目指すことではないことを意味しているだろう(今村1993:123)。そして、社会福祉

の日常から離陸することにこそ、社会福祉学という学問体系は、意義がある(大澤2012:19)。まさにメタ・クリティークという概念装置は、これらの洞察を踏まえたものである。

2つは、「意味」という意味である。社会福祉の全体像を見出すためには、意味を変換するための装置が必要であった。しかし、そのことがなぜ二元論というキーワードを用いるのか、そして、何を解明しようとするのかという動機にも向けられる。これも本質に向かう意義であるが、このような研究は、どのような地平でもって、いかにして社会福祉学研究のパフォーマンスを向上させるのかにかかっているだろう。そして、この問いに答えることがキーワードの意味不明とミスリーディングを払拭することに結びつくだろう。

3つは、この意味を問うことが、つねに社会福祉学の全体像への問いの形式として存在することである。本質への問いは、社会福祉とは何かを求める社会福祉学の原理へ向かう道である。

### (2) 社会福祉概念への問い

二元論というキーワードの特徴は、何といても社会福祉概念の曖昧さ、混沌や複雑さを取り出せる契機になることである。

したがって、つねに「どのように違うのか」という対立点から始まるので、二元論はいたるところに出現する。根本的な対立構造ほどではないが、違う局面として捉えと、それらは2つに区分され、矛盾や相容れない多様な様相を見せる。それらは、便宜上「対立」、「二極」、「分化」、「二者」、「二分法」などのような用語となって登場する。さらに混沌した部分と確実なものの対立、どう見ても対立軸としての「矛盾」などがあげられるだろう。それは、要するに「概念(言葉)」の問題である。または、表現方法としては「2つの違った考え方」「次元が違う」「観点なり視点の違い」などがあるだろう(高田1995:101)。

それでは、社会福祉の多様な二元論の形式を取り出してみよう。

まず1つは、社会福祉学の学門領域をめぐる「区分」としては、政策論と技術論、政策と実践、ソーシャル・ポリシーとソーシャルワークというような学問的な領域も含めた対立構造である。また、明確な区分ではないが、「基礎と臨床、学際性と固有性、理論における法則定立的学問分野と問題解決（課題解決）学問分野、マクロとミクロの特性の対立、政策論や方法論の座標そのものへの批判対立、歴史法則の歴史観の対立」「福祉政策学と臨床福祉学、制度政策論と方法技術論、ケアとコントロール」なども含まれる（丸岡2006：142, 146）。

2つは、本稿のような一元化に向けたモチーフを最初から貫いているものと、それ以外の方法を探るものとの対立である。これは、対立構造の次元も違うが、具体的には、二者択一論、統合論、分離論がある（古川1994：143）。

3つには、学問的な「立場」での实在論（唯物論）と観念論という学問観、思想観、世界観の相違によって言説世界の捉え方が違う。体系論的科学構想と構造論的科学構想ともいわれる。

例えば岡村は、「本質把握への方法」を2つに分類した。1つは、「外在的立場」（孝橋、田村、竹中、雀部）と2つが「内在的立場」（岡村、竹内）という区分である（松田1979：10-12）。岡村の用語である「外在的立場」というのは、言い換えれば、外側の世界に完結した別の体系（政治学、経済学、社会学などの学説）があり、その文脈に依存（依拠）する立場である。さらに言い換えれば、それは、同時に社会福祉に固有の原理を求めない立場にあることを意味する。

4つには、学問的な根拠としてのディシプリン、社会福祉学の原論の「体系」、社会福祉の「対象」や「援助の方法の内容」などをめぐる対立である。

これの代表には、ソーシャルワークとソーシャルサービスの相違があげられる。また、ソーシャルウェルフェアとソーシャルサービスの捉え方の区分もある（Kahn & Kamerman 1980：3-5）。さらには、ソーシャルワークの「個人と社会環境」

という援助活動の対象から、援助対象としてのミクロである「個人（家族）」と組織やシステムのマクロの対象までも対立構造として見られるであろう。

5つには、研究上における対立関係のあり方をめぐる議論である。つまり、国際比較に代表されるように、社会福祉研究の基本軸を対立構造として捉えるタイプである。これには、根本原理の対立、全体像や研究的な枠組みの相違、福祉哲学や福祉史との葛藤、固有性や独自性との距離、他の学問領域との学際性や横断性への依拠、国際的な社会福祉学のポジションなど、社会福祉の多くの個所で、大なり小なりの対立的で分断的な思考形式が存在することである。

例えば米本は、この二元論を「関係論の系譜」（米本2012：107-110）として区分している。彼は、視点、機能、関係として3つの次元でとらえた。まず、関係を論ずる「視点」として「社会問題的な発想」「生活問題的な発想」「生活構造論」「生活援助（支援）」と4つに分けた。さらに「機能分析」として、「固有・補充・補完・代替」に分け、「関係」は、「社会政策対社会事業、社会保障対社会福祉、社会福祉制度・政策対社会福祉実践・技術、ソーシャルポリシー対ソーシャルワーク」に設定した（米本2012：107）。

また白澤は、ソーシャルワークと福祉施策のあり方について、「ソーシャルワークの施策との良好な循環の仕組み」としてのシステムを提案している（白澤1992：12-13）。

さらに、二元論ではないが、社会福祉概念それ自体の曖昧さでは、「社会福祉の専門用語」と「一般用語あるいは法律などの他領域の用語」との区別がある。この複雑さが悪循環<sup>3)</sup>となって、社会福祉という複雑なものをさらに複雑に見つめることになる。さらに、このことが深読みやミスリーディングにつながっているのではないだろうか。

そして、社会福祉の定義や用語の多様性と複雑さについて、高澤は、用語の疑問点として次のように整理している（高澤2000：75-78）。①福祉と

いう用語は、概念論議をほとんど不要とする日常語になった。② welfare ではなく well-being に近いのかという検討がないこと。③ 「社会事業，社会福祉事業，社会福祉の3概念が，まったくカテゴリーを異にする概念であるかのような議論の仕方」もなされ，その過程で『福祉』という言葉だけは着実に全社会的規模で広がっていった。反面，ソーシャルワークというカタカナ語は，この概念論議からは切り離されたところで，狭い専門職の間の機能的用語として生き残っているのである」（高澤2000：76）。

そして，社会福祉概念をめぐる二元論は，「問いかたち」のままで示される。さらに，この問いは，意味をめぐるいくつかの経路があるだろう。それに答えるために，概念としてのキーワードからその手掛かりを見よう。

### 3. メタ・クリティークという概念装置

#### （1）キーワードの意味

社会福祉のキーワードは，社会福祉の全体像と結びつける契機となる。しかし，すべてのキーワードが結びつくわけではない。ある法則が存在する。それは，意味にかかわるもの，すなわち視点と文脈にかかわるものをあらかじめ内包しているのである。

したがって，意味にかかわる問いを持っているのは，二元論だけではない。これは同時にメタ・クリティークという概念装置に組み入れられる契機でもあるのである。

二元論以外の例を挙げると，エンパワーメントやストレングス視点，ケア・マネジメント<sup>4)</sup>，社会資源<sup>5)</sup>，ニーズ，地域福祉などである。これらのキーワードは，いずれも概念装置に変換すべき視点や文脈が要請<sup>6)</sup>されている。このようにキーワードの法則とは，まさに原理とぶつかる事態なのである。そして，これらは，必然的に社会資源「論」，ニーズ「論」や地域福祉「論」のように，すべてがそのように表現されてはいないが，「なにになに論」として分節化するコンテキストに

置かれているのである。

したがって，これらのキーワードとは，すでに同時にメタ・クリティークという非常識で批判的な視点から見なければならぬような事態のことである。つまり，二元論などのようにキーワードに内包された問いに答えるためには，形而上学的に相対化して眺める以外に手が無いというような差し迫ったことなのである。

つまりキーワードは，単なる概念ではないのである。この言葉（鍵概念）は，最初から不可解で謎に満ちている。決してキーワード辞典では意味がつかめない。だからこそ，それは，社会福祉の謎めいた混沌から，はっきりとした基本形や骨格をつかみ取りたいというメタ・クリティークの動機に支えられているものである。

#### （2）メタ・クリティークの視点

概念装置とは，J・ロック（Jhon Locke）が「感覚器官」という思考の過程システムによって，それを客観的な証明に換えたものに近似している。それは，「単純観念を集めて合成し，新しい複合観念（様相，実体，関係）を織り上げていき，それが人間の思想形成につながっていく」というように，この装置が持っている役割は，意味（概念）を変換することにある（浜口1987：123）。

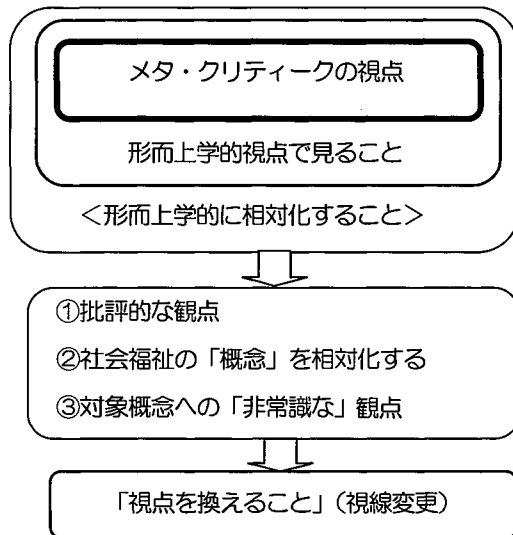
また内田は，概念装置について「理論・学説のなかには，学者が認識の手段として——最初に作業仮説のかたちで——創造し駆使した一連の概念装置が，理論・学説体系の構成要素のかたちで組み込まれて再現している」と，自分の認識手段として使いこなす必要があるとしている（内田1985：148）。そして，自前の「概念装置」を組み立てるべきだと指摘している（内田1985：149）。

下記の図1で図解したが，概念装置の機能の代表的なものは，交通整理である。それは，社会福祉の「意味」を読み解く機能にある。

この装置の「意味」の変換とは，「視点と文脈に変換する」という機能である。そのなかでも，とりわけメタ・クリティークの「視点」，すなわ

ち「視線変更」という機能は重要である。

図1 メタ・クリティークの視点



この場合、「視点」とは、簡単にいえば、「ある対象」について、それを何らかの「概念」との関連で見ることである。そして、視線変更とは、この関連する「概念」を別の「概念」に変更することに他ならない。常識的な既成の概念を別の概念でもって、その関連を非常識に変えてみるという試みである。

そこではこれを象徴的に形而上学的な視点と命名をした。つまり、これが交通整理自体の動機や意図を示しているところの重要な態度と着眼点なのである。この動機は、「常識的な知の自明性を問い、その基本的な前提そのものを常に破壊するというベクトルをもっている」というものである(大澤1993:28)。

すなわちメタ・クリティークの方法とは、つねに自明で常識的な概念について、非常識な観点から「批評」(クリティーク)することである。

そして「動機」<sup>7)</sup>は、「直観でおかしい」「何かが常に抜け落ちている」「何か腑に落ちない」「何か釈然としない」「何か分らないが、理解できない」「社会福祉の何が言いたいのか、その道筋が不明である」などであり、そのような不可解な点を解明していくことである。

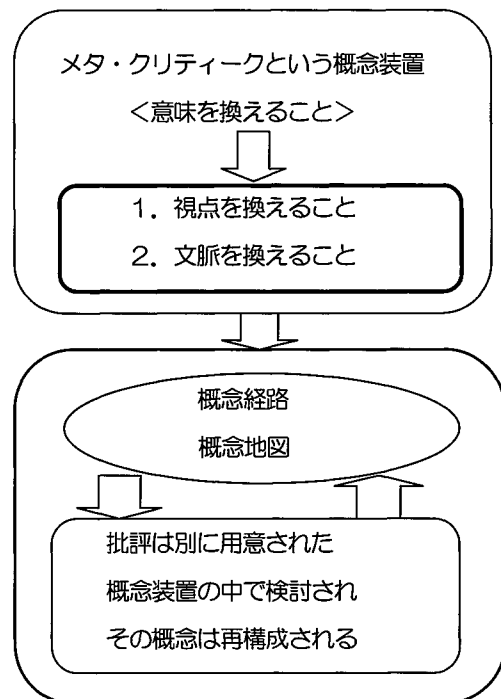
### (3) メタ・クリティークの文脈

メタ・クリティークという概念装置の機能は、まず批評的な視点だった。そしてもう1つの機能は、文脈の変換である。

何度か繰り返してきたが、意味を変えるとは、批判的な動機によって、視点を変換することから始まる。次に文脈を変換して、展開していくプロセスのことなのである。

このようにしてメタ・クリティークの概念装置は、最終の段階に行きつく。これは、例えばキーワードであるところの二元論をテーマにして、「概念経路」と「概念地図」<sup>8)</sup>を作成することである。これらは、別に用意された概念装置の中で、その概念を再構成する試みである。

図2 「概念装置」の全体図



## 4. 二元論の原型

### (1) 二元論の系譜

社会福祉の思想的な背景の参考として、他の領域のなかの二元論の系譜を概観してみよう。

二元論は、プラトンやアリストテレスなどの学問の起源からすでに存在する<sup>9)</sup>。学問上での系譜という局面で見ると、新しいものと古いものを詰

め合わせたパラダイムが偏在する。つまりこのパラダイムこそが二元論の背景であり、世界を説明する原理に大きな影響を与えるものだからである。

例えば、知の枠組みというパラダイムにおいては、「近代」というタームが極めて重要な契機である。このことは、後にも見ることになるが、例えば、孝橋の社会福祉観がまぎれもなくその時代の影響を受けていたことや、社会福祉の固有性を認めずに他の学問に傾斜したことからも言えるだろう。そして、他方では、学問それ自体が1つの枠組みの中の「流行」としての「変化・変遷の系譜」として捉えられるだろう（高田1995：101）。

ところがこのパラダイムが示すところの「近代」の位置づけでは、アリストテレス以来の知の秩序を整理するものであり、その根拠を区別、分別してきた系譜がある。これが二元論の歴史である。

もう少し敷衍すると、パラダイムの概念は、概念として見ても複雑で多様である。それは、ある時代を貫いて存在する認識論的な枠組みのことである。学説の中では、別名「エピステーメ」や「通時的と共時的」という表現方法もあり、その意味は、支配されているもの、背景としてあるもの、視点や文脈の違い等、さまざまな秩序を根拠としたものに「支えられている」のである。この時間と場所を背後で支えるものが二元論の根拠となる訳である。

また、特に16世紀から18世紀の学問の変遷は、その世界を言語の網の目によって正確に名指しができ、分類し、秩序づけられると考える時代であった。しかし、それは後にポストモダンによって反転するが、ある意味、近代は、もう一度ここが二元論の復古となったと言えるだろう。

なぜならそれは、近代を象徴する二元論が学問の基礎を作ったデカルトによって、理性や感性、主観や客観という現代思想や哲学の中心的なテーマとして追求されたことである。そのアポリアは、今も対立したままで、まるで社会福祉本質論争のように放置されている。哲学史上のアポリアであ

る主客論、心身論という二元論は、現在もまったく解かれていないのである。すなわち、哲学や現代思想もその骨格には、おおきく二元論があり、それが絡み合っているという複雑さがある（竹田1993 a：218）。

近代は、このように二元論にまつわるものが、新旧の差異であり、新しいものは新しい条件を背負っているために、二元論のような「観念」の差異、「構成される認識論」の差異がいつも絶対的に対立構造となる。

以上要約すると、この二元論は、「思想的な背景」の根本的対立と「学問として通底するところ」の立場とが核心であるだろう。特に近代以降、現代思想や哲学の領域では、さらにはパラダイムもエピステーメーも批判の対象となったのである。まさに学問の再編成が求められたのである。

## 5. 社会福祉の二元論

### （1）典型的な二元論

二元論をめぐる系譜で取り出した要点は、現代の学問も世界を眺める視点や文脈の捉え方を何によって、いかに再編成するべきかであった。このことは、社会福祉学も現代の学問全体とおおむね同じ方向であると考えられる。

ここでは、「社会福祉本質論争」の二元論について、社会福祉の世界を眺める視点や文脈を中心に概観してみよう。

社会福祉の本質論争の発端は、『大阪社会福祉研究』創刊号の「社会福祉事業の正しい姿を確立することを目的としています」（大阪社会福祉協議会1952：6）で始まった。その論争は、あくまで「真正」の方法だけを追求するものだった。

しかし、ここで注意しなければならないのは、この論争が政策論と技術論という区分として、「正しい姿」を追及したものではなかったことである。決して「本質」を「論争」したのではない。論争で重要なのは、対立する論者がそれぞれの認識方法の固有性を自覚していることにある。そうではなく、まったく二つの立場同士が客観的観点を持

ちえない議論であった（松田1979：32）。

したがって以下では、それぞれが対立した観点を二元論として捉えて、「意味」（視点と文脈）を自覚した体系的な観点（メタ・クリティークの視点）から見てみよう。

つまり、ここで検討するのは、この論争が社会福祉学を立論する学問観と社会福祉を構成する世界観の相違による根本的な対立として限定して展開するものである。

学問を構成する世界観でいうと、例えば、孝橋は、社会科学的アプローチと言われているが、社会福祉について、「社会事業」という言葉で以下のように表現している。

「社会事業を資本主義制度の歴史的・社会的規定のなかで把握し、資本の運動法則、資本主義的蓄積の絶対普遍的法則、労働者階級の貧困化法則を前提ないし条件として、社会科学方法論に基づいた社会事業の本質を解明しようとする」（孝橋1973：7-8）

現在のパラダイムで孝橋の社会福祉（「社会事業」）に対する立論は、成立しにくいだろう。この点では、形而上学やキリスト教、そして孝橋のようなマルクス主義などの考え方がかつては客観的な真を所有しているという確信によって立っていたことに注目しなければならない。しかし、現在それらは、すべてある観点から見られた、それぞれの解釈に過ぎないのではないかとこの懷疑主義にさらされている。それがいまのポストモダンなどの知見である。

このように他領域のアポリアである限界点から見て、社会福祉の本質論争のポイントは、他ではない。つまり「政策かソーシャルワークか」という二元論から、われわれは、何を読み取るべきなのかということである。

## （2）二元論と対象論

二元論がもたらしたものは、不毛の論争だけではない。まずは、この枠組みが持っている一元化や多元化や脱二元論を含め、議論は、次の3つが

ある。それは、再掲するが、二者択一論、統合論、分離論である（古川1994：143）。

次には、社会福祉の対象論をめぐる要点を見てみよう。本質論争での主役のもう1人である岡村の「原論」から見てみよう。

「われわれの生活というのは、生活者たる個人と生活環境としての社会制度との相互関連の体系である。生活は、生活主体者たる個人ないし人間だけでもなく、生活環境たる社会制度でもなく、両者が交渉しあい、関連しあう相互作用そのものである。『社会生活の基本的要求』をもつ個人が、それぞれの要求に関連する社会制度を利用することによって、その基本的要求を充足する過程が、われわれの社会生活にほかならない」（岡村1980：83）。

ここで岡村は、「生活概念」の内容を説明した。それは、文章の中ほどにある「関連しあう相互作用そのもの」である。これが社会福祉の「対象」である。そして、その対象は、もちろん実体ではなく、極めて抽象的な「概念」<sup>10)</sup>である。彼は、「社会関係」に注目すると同時に、「関係」が対象であることを発見したのである。

したがって社会福祉の全体像の立論を作成する場合には、その世界観が真かどうかという解釈を延々と持続することではなく、社会福祉の対象の有用性や適格性に向かうべきであろう。

これに対立する孝橋の対象論は、オリジナルの社会福祉原理を体系化したものではない。むしろ、彼の立論は、「資本主義制度の構造的必然の所産である社会的問題に向けられた合目的・補充的な公・私の社会的方策施設の総称であって、その本質の現象的表現は、労働者＝国民大衆における社会的必要の欠乏（社会的障害）状態に対応する精神的・物質的な救済、保護および福祉の増進を、一定の社会的手段を通じて、組織的に行うところに存する」（孝橋1962：24-25）である。

この立論の要点は、前半の部分は、体系化していない単なるイデオロギーである。そして、後半は、「政策論的な体系」の内容に言及している。

孝橋の論理は、分析的に見てもそれらの機能が、経済学や社会政策との関連からの説明であって、社会福祉ではない。岡村に比較して、理論的文脈や問題設定が社会福祉独自のものではないことが理解されるだろう。

以上のことから見て、社会福祉の本質をめぐる二元論の違いは、岡村と孝橋の相違でも明らかのように、「対象」をめぐる立論の内実にあることが理解される。

## 6. 二元論のエッセンス

### (1) 二元論から本質論へ

それでは二元論というキーワードが示す視点と文脈を見てみよう。それは、まさに二元論だからこそ出現したパースペクティブである。そして、それが再構成に向かうべきキーワード足りうるのかというエッセンスを取り出してみよう。

この場合、本質とは、二元論の「真正」をめぐる懐疑論を超えて、理論的な枠組みや体系の完成度（普遍性）におかれるべきであろう。別の言葉でいうと意味連関が視点と文脈によって構成され、同時に言説の秩序がしっかりと成立していることである。

二元論から全体像への道筋を求める場合には、それぞれの立場が唯物論（実在論）であれ観念論であれ、必ずそれぞれの課題を乗り越えなければならない。それぞれが対立していたとしても徹底的に突き詰めたものこそが普遍性を持つのである。

ここでは、その普遍性への道筋がいかにして可能なのかを検討したい。

それは、社会福祉の全体像につながるものである。しかし、本質への道筋を探し当てる前に、近代哲学の知見がわれわれにもたらした示唆を見てみよう。それは、「客観的なあるいは精密な認識の不可能性ということに集約される」（竹田1993b：14）。このことは、もはや西洋近代哲学の根本的なパラダイムが、決定的に滅びてしまったことを意味する。われわれは、主客論や心身論に代

表されるような二元論という解けない謎を解く訳にはいかない。ここには、もはやミスリーディングが存在しないのである。

そうであるならば、その限界点を踏まえたうえで、社会福祉の地平に切り開かれた「二元論」のエッセンスを独自の方法で取り出すしかないであろう。

さて普遍性への道筋は、二元論から切り開かれるプロセスにある。そのプロセスはこうである。不明、不可解、違和感は、つねに「何がどのように違うのか」という素朴な異同、相違点、対立、矛盾から解放を求める思考が開始されるだろう。このときに、正解が求められる。

また、独自の観点として留意しておかなければならないのは、ミスリーディングの審判がいかにして可能かである。普遍性の基準なしには、審判することができないからである。

### (2) 二元論から普遍性へ

独自に社会福祉の理論を作成した岡村の立論を見てみよう。彼の立場は、二元論のなかで区分され、政策系ではなく、技術系であるとする多くの研究がある。

例えば、松田は、岡村理論の「主体」概念について、「生活における主体を個人とおき領域を環境とおけばその主体と環境との関係は個人と環境との関係」になるという（松田1979：32）。松田が指摘したのは、これは岡村理論が「アメリカ社会事業論の枠組みと変らぬもの」だということである（松田1979：32）。

これに対して、船曳は、岡村理論に対する多くの読者のミスリーディングを批判した。その個所を参考に見てみよう。

「氏は、現実社会福祉、あるいは社会福祉事業ということばで呼ばれているものを捉える方法そのものを構築しようとしているのである。しかも、現実社会福祉、社会福祉事業を批判し、創りかえる方法にもなる認識方法である。現実社会福祉が、どう展開するかを予測し、そこから現

実を見直そうとしているのである」(船曳1979: 84)。

以上の船曳の論旨は、二元論批判になっている。逆説的であるが、われわれが二元論から受け取るべきところが、ここにある。二元論的に問題を捉えた時にこそ、ある発見があったというこの事態である。

では、ミスリーディングとは、いかなる判断基準によって断定されたものなのか。次の孝橋の論点と比較しながらその道筋を見てみよう。

前節で引用した孝橋の社会福祉とは、「社会事業は、労働問題から関係的・派生的に生起する社会的問題に対応する施策」であり、「孝橋の社会事業論は、労働・社会政策の軒先にぶら下げられた理論、いわば軒先社会事業論である」と指摘した(古川2012: 93)。つまり、彼がいくら施策群のなかから独自の性格を持つ施策として限定したとしても、経済一元論である。彼の社会福祉の対象はあくまで経済である。これでは、社会福祉のディシプリンもなく、独自性もない。これと先ほどの岡村理論とを比較すると、政策か技術かという選択ではなく、また単なる交通整理でもない。それは、社会福祉学のディシプリンに近づくことが、すなわちミスリーディングの基準に対する答えではないだろうか。

そして、二元論から全体像に結びつく道筋は、いくつかの概念経路がある。それは、固有性が普遍性へと転換するプロセスにある。

## 7. メタ・クリティークの視線変更

### (1) 二元論的思考

キーワードは、メタ・クリティークの方法によって、視線変更が開始される。それは、二元論的思考という変換である。まさにミスリーディングの根拠となる視点の導入である。以下に社会福祉の本質に向かういくつかの二元論的思考の概念経路を見てみよう。

1つは、つねに視点の次元を変えろということである。それは、考え方の順序をかえることであ

り、また、前もって予備概念で全体像を決めておいて、それとの関連で眺める視点が必要となることである。

これを形而上学的な視点といったが、別の言葉では、俯瞰的、鳥瞰的な視点ともいえるだろう。政策か技術かという究極の問いは、どうしても社会福祉学の学問論の体系とつねに連動している。つまり、その選択によって学問観が決まるのである。その中心の1つは、かつての体系論的科学構想と構造論的科学構想というような思想的な立場へのコミットメントなのである。

2つは、自明性に対する批判精神から派生するものである。それは、二元論的思考の行きつく先にあるオルタナティブである。

この思考方法のポイントは、二元論的思考を先延ばしするのではなく、対象や範囲を限定することにある。つまり、普遍性への懐疑論はさておいて、この思考方法で批判してオルタナティブを作成し、説明しなければ、固有性や独自性につながらない。

それも重要なのは、この思考方法を徹底的に追い詰めて、社会福祉の説明原理の枠組みを精密に掴み取ることなのである。だからこそミスリーディングと宣言した以上は、オルタナティブとしての解が求められているのである。

例えば、岡村は、社会福祉の「狭義と広義」という二元論的思考に異議を唱えた。彼は、この限定性に対して、まだ決まってもいない社会福祉の対象に広義も狭義もないという批判をしている(岡村1981: 45)。

このような二者択一の二元論的思考から派生するものは、非常に多い。メタ・クリティークの視線は、先に見てきた二元論の枠組みが3つ(二者択一、統合、分離)あったが、これ以外の道があるのかないのかを模索することでもある。

とりわけ米国のソーシャルワーク論では、個人のパーソナリティを対象とする実践に傾倒したケースワークに対して、2つの原点(個人か環境か)がある。それは、リッチモンド(M. E.

Richmond) 以来の伝統である社会環境への視点を取り戻すべきとして「リッチモンドに帰れ」という原点回帰であった(空閑2009: 71)。また、ハウ(Howe, D)は、「ソーシャルワークは常に2つの顔をもたなければならない。それは、個人を代表して社会に対峙し、また社会を代表して個人に対峙する。弱者のケアと規則違反者のコントロールの両方を行うことが出発時からのソーシャルワークの特徴である」と対立点について述べている(Howe, D 2009=2011: 192)。このように二元論的思考はソーシャルワーク学説史としても伝統的に存在している。

3つは、イデオロギー対立からの解放である。この経路は、また原点に帰るという意味が込められている。というのは、対立となったものをそのまま「どちらの立場が正しいのか」ではなく、それぞれの対立の根拠をさかのぼって見つめることである。

## (2) イデオロギー的思考

社会福祉の二元論で、理念や理想についての思想的な立場の相違は、どうしても看過できないところである。ここでは、根本対立であるイデオロギー思考の経路を見てみよう。

前節の二元論的思考とは違って、この思考は、決定的に不寛容であり、断定的であるのに科学的な根拠はそれほどないものである。どちらかという政治的で宗教的なものである。しかし、現実の社会福祉は、このような混沌の世界そのものである。例えば経済学的視点で広井は、次のように社会保障を整理している。「『市場』と『政府』という二項を立て、かつ『効率的』『公平性』という2つの観点をベースにして議論を展開する」(広井1999: 101)。他方で法的視点から菊池は、「生存権が社会保障の法的基盤になっていることである」と概念規定している(菊池2001: 56)。

このように経済学や法学の立場における課題は、それぞれ確かに捉えられているが、社会保障についての課題を克服する理論的枠組みは見えない

い。それぞれの対立を超えた社会福祉政策論との関連が必要である。

イデオロギーという用語は、対立する「論敵の世界観を欺瞞的なもの、無意識的な被拘束性のうちにあるものとして目指そうとする場合にこの言葉が使われた」(竹田2004: 114)。要するに、この対立構造は、何と言っても宗教的な対立が絶対的なものなので、一方がこれらの正当性の主張するところを他方が覆すことは不可能に近い。

例えば木原は、「原論」を3つの要素に分類している。社会福祉以外の学問領域での原理や原論については、①学問領域の独自の概念、定義および全体の輪郭としての体系、②学問の根幹をなす根本原理・哲学、③学問の理論史と背景の歴史という構成要素であるとした(木原2012: 111)。ところが、社会福祉原論の場合は、そのなかで、①は重視されているが、②と③歴史・哲学については、やや軽視されてきたという。そこで、とくに「枠組み」や「固有性」にとられすぎたのは、「学内政治的な側面があったのではないか」(木原2012: 111)という指摘である。この木原の立場は、本稿の「二元論のエッセンス」で検討した固有性や独自性への批判となっている。しかし、本稿のミスリーディングへの根拠は、学問としての枠組みもなく固有性もない立論を徹底性への欠如とみなすところにある。

なぜなら、社会福祉のイデオロギー的思考は、矛盾を容認できない立場であるし、対立の溝を埋めることもできないからである。この思考は、相手側の論理を一切認めないという不寛容がある。

しかしながら、この思考経路は、どちらかのイデオロギーの正当性を検討することではない。また、イデオロギーの矛盾を解消するような方策への道をたどることでもない。そうではなく、この思考経路の特徴は、普遍性の方向が違う。その方向とは、単なる思いこみではなく、その世界観を確信するに至った条件を解明することにある。したがって、それは、矛盾を解消することよりも、社会福祉学の固有性から普遍性へ向かう道筋をメ

タ・クリティークの視点とすることなのである。

## 8. メタ・クリティークの文脈変更

### (1) 相互関係のメタ・クリティーク

社会福祉のキーワードがもたらす最大の弊害は、ミスリーディングにつながることである。この原因のほとんどは、二元論の対立構造の文脈を無視して相互に同じキーワードをそれぞれの文脈で説明しないままに放置するということである。

このような混乱は、社会福祉のキーワードの持つ意味の二重性や多義性にある。それは、人権的な政策実践という意味とソーシャルワークの機能としてのアプローチという2つの意味がある。また、ソーシャルワークのなかでも1つが個人への解決的な機能、2つが人権擁護的なサービスの実施というように分離している。

ところがミクロ実践とマクロ実践は未分化であり、分離した状態ではない。「個別支援の蓄積が、社会資源の開発、地域福祉計画の策定や地域福祉の推進、ソーシャルアクション等につながなければならない」という未分化である(岩間2009: 192)。また、分離を回避するために、福祉施策とソーシャルワークの「あるべき関係」について、白澤は、「各種の施策とソーシャルワークが対等に位置づけられ、両者間でパートナーシップが構築される必要がある」としている(白澤2011: 3)。

しかし、福祉施策のキーワードであるソーシャルインクルージョンも「共生」や「連帯」もそれを根拠づけているのは、単なる理念やイデオロギーである。これと個人の社会関係を支援する実践理論との相互関係を補完するのは、それほど容易ではないだろう。

ここでは、特に典型的な相互関係が見られる「自己決定」というキーワードを検討してみよう。

ソーシャルワークの伝統的な言語である自己決定は、福祉政策では、その理論的な根拠が結局、人権的な観点にしかない(沖蔵2012: 217-246, 中村2012: 247-267)。この場合、福祉政策的な視点というのは、政府・国家が実施する福祉政策の

ことであるが、ここに理論と言われるようなものもほとんどない(坂田2000: 2-5)。

さらに政策系言説の代表である国試テキストでは、何度も「バイステックの原則」が登場する。そこでは、自己決定は、「地域住民の集団的な意思決定を尊重し、その決定について受け入れていくこと」(岡田2009: 265)としている。しかし、これは社会福祉の独自の政策的な基礎概念ではなく、政治学や社会学の意味内容だとしても遜色はないだろう。これでは、言葉を変えていうと、「人権を守ること」で足りることもある。

ところが、この自己決定の相互関係は、ほとんど混乱とは受け取られてはいない。同じキーワードを別の文脈から説明をしているものの、その根拠は、それぞれが概念規定を持っているのである。政策系は、社会福祉の利用者の人権尊重が根拠であるが、一方、ソーシャルワークでは、その実践の「基本原理」として機能して、「ソーシャルワーカーが持つ価値から導き出された」(岡田2002: 103)ものである。

しかしながら本来、キーワードの文脈が違うのだから、当然意味が違う。キーワード以外の社会福祉の用語であれば、相互関係があろうがなかろうが影響はないだろう。

しかし、社会福祉学におけるキーワードには、特別な意味がある。それは、キーワードが説明原理にもなりうる使命を背負って存在しているときには、相互関係などではなく、徹底した意味内容が語られるべきである。

そのことでいうと、キーワードに相互関係があること自体が学問のダブル・スタンダードである。ここにこそ社会福祉学のディシプリンが求められるべきだろう。

ここで、メタ・クリティークから意味の変換を試みた自己決定論を見てみよう。

「専門家が入居者の『自己決定』に関与することであるが、通説とはまったく違う視線変更である。それは、つまり老人ホームなどの施設の生活について、入居者が『自己』の施設生活上の課題

「今日は何をするのか」、「今日はどんな服を着るのか」というような生活計画、生活設計)を『きめること(決定)』に介入(支援)することである。」(丸岡2012:63)。

この自己決定は、これまでの常識を超えて、ソーシャルワークの文脈から非常識に展開したものである。自己の何を決定するのかという意味では、「生活計画と生活設計」に置いたもので、決定は、当事者におかれている。

このような意味から、相互関係のメタ・クリティックの核心は、何と言っても、文脈を自覚しているという点にあるだろう。さらにこのキーワードを用いるときには、二元論であることの自覚が求められる。

## (2) 断片化のメタ・クリティック

社会福祉の言説において、意味が読み取れないのは、その知識が断片化して、関連がないということである。

相互関係での文脈は、それぞれに文脈が規定され、意味を別に持っていたが、ここにきてキーワードの断片化とは、文脈がそもそも見当たらない事態のことである。そして、断片化が完結して、独り歩きを始める。このことへの「文脈探し」という意味変更である。

ここでは、二元論の知識の断片化がもたらす弊害に対する批判とオルタナティブとしての変更後の成果を検討してみよう。

さしあたって、国際ソーシャルワーカー連盟(IFSW)の「定義」(Definition of Social Work, July 2000)<sup>11)</sup>と「解説」(Commentary)から見てみよう。

「ソーシャルワーク専門職は、人間の福利(ウェルビーイング)の増進を目指して、社会の変革を進め、人間関係における問題解決を図り、人びとのエンパワーメントと解放を促していく。(後略)」

さて問題は「解説」のなかでソーシャルワークとは、「問題解決と変革」(Professional social work is focused on problem solving and change.)

の2つであると強調したことである。ただし、「定義」ではそのようには読めない。それ以上に、これは、問題解決の方法の対立ということでもなく、もう1つの「社会変革」(social change)のつながりがまったく不明である。

さらに本題であるが、「人びとのエンパワーメントと解放を促していくこと」の「エンパワーメントと解放」(the empowerment and liberation of people)が3つ目の要素として挙げられている「唐突さ」にある。

特にエンパワーメントと解放が強調されているが、その文脈が見えない。何よりも、この3つの関連が不明である。その理由は、「人びとのエンパワーメントと解放を促していく」が同列に置かれているからである。

それでは、エンパワーメントをどのような文脈に変換して読み解くのかである。

まず、これは、エンパワーメント自体が「権力を持つこと」というように、他の学問領域で使用されるような意味で使用されるとその途端にソーシャルワークとつなぐ道ができる。

それは、例えば「社会資源」というキーワードに含まれている「関係的な資源」(富永1986:331)の一つの要素としてエンパワーメントを掴み取ることである。そうであるならば、ソーシャルワークとは、利用者とエンパワーメントを結びつける活動であるという通説の文脈に組み入れることができるだろう。

しかし、エンパワーメントが社会資源であるとするならば、ソーシャルワーク自体がまったく固有性を失うことになる。つまり、エンパワーメントを社会資源として活用するということは、「人間行動一般としてしか理解されていませんので、社会福祉はそれを変容させる活動に過ぎなくなってしまう」と固有性がまったくなくなることになる(船曳1993:173)。

したがって断片的な知識であるエンパワーメントがソーシャルワークの文脈の中に位置づけられるためには、社会資源の文脈に変換することでは

ない。ソーシャルワークの活動が「人びとのエンパワメントと解放を促していく」のではない文脈へ変換することが必要である。

それは、ソーシャルワークの固有性に行き着く方向への変換である。IFSWの定義のセンテンスには、まったく固有性が含まれていない。なぜならエンパワメントと解放を促す活動は、社会福祉の活動であるよりも、むしろ政治や教育、あるいは市民運動の場面（文脈）のほうに適格性があるからである。

そうであるならば、断片化したエンパワメントを変換し、ソーシャルワークの文脈にいかに取り入れるかということである。

すなわち、ソーシャルワークの活動とは、「人々が自分の社会環境に影響を及ぼす力を獲得し、それを自由に発揮できる社会的状況を作ること」を目標にした、環境に向けた相互行為過程に介入すること（船曳1993：125）である。したがって、「自分の社会環境に影響を及ぼす力」がエンパワメントであり、この文脈なかでこそ的確に意味が変換されるであろう。

### （3）思想的文脈のメタ・クリティーク

さて、もう1つは、エンパワメントというキーワードが持っている思想的な背景に関することである。ここでは、エンパワメントは、誰もが指摘するように、ポストモダンの影響下にあることについての意味変換について検討してみよう。このキーワードが定義の中に「唐突」に出現しているのは、1990年代のソーシャルワークの理論に影響を与えたものが反映しているからである。すなわち「近代が作り上げた思想への徹底的な否定性と相対性」である（丸岡2007：46）。

エンパワメントは、ポストモダンの文脈でいうと、M・フーコーの近代批判と同調している。それは、近代社会の管理化、規範化、合理化の度合いを高めていく中で、人々の「自由」が圧迫されたその感覚を表現したものである。

このことは、ソーシャルワークの文脈では、ソー

シャルワーカーという援助主体と、クライアントという被援助主体との介入関係についての批判となって登場したことから見ると、それは、社会の権力構造の中で支配されていた構造とシステムに関する批判として捉えられる（丸岡2006：43）。

いずれにせよ、この近代批判の問題の所在は、ソーシャルワークの文脈で議論されることの是非や信憑性にあるのではない。キーワードの断片化を回避するためには、援助対象と現代社会の問題とを結びつけるところに、エンパワメントがどのように存在するのを見極めることが重要である。

この場合、ソーシャルワーク論を超えて、社会福祉の「対象」と「関係」をめぐる2つの方向が見出されるであろう。1つは、M・フーコーに代表されるように、ポストモダンにおける社会的構造との関係から整理する方向である。それは、ソーシャルワーク論で議論される「主体」の本質についての考察である。この議論は、しかし本質そのものの探求ではなく、支配的な考え方や制度への批判でもなく主体のあり方について、社会福祉の対象論としての原理を組み立てることが求められる。特にこの主体は、仮説的なものから、実践場面に移していくプロセスで検証できるだろう。

もう1つは関係論の方向で、エンパワメントを強調するというよりも、他の生活問題からアプローチするべきであろう。この場合、オルタナティブとしてのステージは、現代社会とクライアントの「関係」にある。その関係とは、その社会をめぐるところの「他者」と共有する「関係」に求められるだろう。

そのとき「他者」とは、他者の生活と自己のそれとの内省的なものを包含したキーワードである。すなわち、ここでエンパワメントは、他者との関係論として変換されるだろう。われわれの現代社会における生活についての不安全感はエンパワメントで満たされるのではなく、他者との関係論から客観化されなければならないだろう。

そして、思想的文脈の核心は、思想的背景の一

貫性を自覚しているという点にある。エンパワメント、主体、他者というようなキーワードを用いるときには、近代批判の文脈から離れて、断片化しないことが求められる。

## 9. おわりに

メタ・クリティークの視点とは、形而上学的な視点である。それは、皮肉にも哲学史上では、二元論の一方の観念論のことであるが、その特徴は、独我的、主観的であり、「自分の立論を最終的には決して自己証明できない」（竹田1993b：22）ことである。さらに、この非常識な視点（主観的な観念だけ）からだけしか出発しないという理由は、二元論を何とか回避して、世界を一元的に説明しようとするモチーフがあるからである（竹田1993b：22）。

そして、本稿は、メタ・クリティークの方法から、「視点と文脈」の変換を試みた。すなわち「相互関係」と「断片化」に限定して、概念装置の視点と文脈への道筋を示した。

まず、相互関係では、二元論の存在を自覚することである。そして二元論というキーワードから学ぶべきは、常に背後に全体像を目指す批判視点への道筋をつけることにあるのではないだろうか。

また「知識」の断片化は、社会福祉学特有の現象でもない。この概念装置からの解は、意味（視点と文脈）を考察する理論的なステージへの転換を常に徹底することにあるだろう。

メタ・クリティークの方法は、これまでの社会福祉の世界を「神の視点」で見ることであると述べたこともある（丸岡2006：141）。このような動機<sup>12)</sup>に支えられた概念装置が、メタ・クリティークの方法である。

そして、この方法のねらいは、複雑で混沌とした社会福祉のキーワードから、全体像や骨格をつかみ出すことによって、そこから基本形や原型を捉えることにある。これによって、原理に至る道筋が急に開かれてくる。この装置がなければ、非

常識な社会福祉の世界は、いつまでも見えないだろう。

## 注)

- 1) 本稿は、メタ・クリティークの方法から理論福祉学を確立しようとするものである。これは、厚東洋輔（1997）が「理論社会学」の使命として、「研究活動を方向づけるところにある」と指摘するようなことである。
- 2) 本稿では、意味をめぐる文脈について、「変換」と「変更」、「視点」と「視線」をそれぞれの文脈に応じて使用している。しかし、意味内容は同じである。
- 3) 例えば武川正吾は、「社会福祉学におけるカタカナ語の氾濫」で、社会福祉事典の「ほ」の索引項目について、ホームヘルパー、ボランティア、ホームレスなどカタカナ語の羅列だと指摘している（武川2000：120-121）。
- 4) この言葉（概念）は、「関連援助技術」とソーシャルワークの技術であるという両義性がある。例えば、古川は「ケア・マネジメントはソーシャルワークの関連技術として位置づけられるべきではない。利用支援という観点からいえば、ケア・マネジメントはソーシャルワークの中核に位置する過程であり、また技術として理解されなければならない」としている（古川2001：235-236）。
- 5) 白澤政和は、社会資源について、「社会資源全体からみると、断片化された一部分の社会資源に関する研究は活発化し、その成果も蓄積されてきたが、それらを合わせた全体としての社会資源総論については、その先行業績はほとんど見当たらない」（白澤1992：110-111）と、断片的なものから上位概念と結びつける場合のことに言及したものである。
- 6) 例えば「アドボカシー」というキーワードでは、専門的機能であると同時に、「権利擁護」という日本語訳が定着しているように人権規

定である。そして、数多くのキーワードがそうであるように定義は曖昧である（横須賀2002：111）。また、これは活動であり、同時に権利を擁護することという、マクロとミクロのソーシャルワーク実践という両面の意味を持つ。

- 7) これは、象徴的に、形而上学的な視点という言葉で表現したが、そのプロセスは、とにかく社会福祉の世界で自明であるとされていることへの徹底的な批判精神が出発点である。
- 8) 拙論「メタ福祉学の構想」のなかで具体的に「概念経路」と「概念地図」を説明しているので、それを参照いただきたい。
- 9) 例えばプラトンの二元論の内実は、イデア論そのものの真正にはない。彼によって「事物と思惟の分離が理論づけられた」（プラトン）ことが発端にある。つまり、実在と観念の二元論が、西洋の学問の基礎を作り、西洋文明を飛躍させたが、同時に多くの矛盾と問題を内包させた（竹田1993：120）。さらにアリストテレスは、事物をイデアの模倣や仮象と捉えたプラトンとは違って、イデア＝形相を個々の存在物に内在するものとして捉えた。そして、彼は、古代ギリシャの知識を理論的知識と実践的知識とに分別し、前者に神学、自然学や数学、後者に政治学や倫理学をおき、初めて「知の体系化」を試みた。このように二元論のような理論的な体系化は、むしろアリストテレスによって確立したものであると言える（竹田1993：134）。
- 10) 実体というのも概念である。すべてが概念であるとも言える。このような形而上学的な複雑な議論が哲学では、二元論の主観と客観のなかにあるが、問題はこのような対立にあるのではない。むしろ、客観的な認識がいかに可能かをめぐる「論理矛盾」にある（竹田1993：218）。
- 11) 定義は理論ではない。定義とは、ここでは、根拠がなく実証性のないものであるが、考え

ることの出発点と捉える。

- 12) その基軸は、常に自分自身がキーワードに対して、オリジナルのストーリーを持っていることである。そこから批判するということである。もちろん直観での疑義もあるが、それは、かならず一般論との関連があること、つまり、他領域でのキーワードの使用方法との異同は批判精神の基本となる。例を挙げれば、「自己決定」というような用語が利用者の立場や視線に立たずに、むしろ経営者や専門家の立場から説明している研究が多い。この視線を変換するというものである。

## 引用文献

- 船曳宏保（1979）『現代社会福祉原論』新評論。
- 古川孝順（1994）『社会福祉学序説』有斐閣。
- 古川孝順（2001）『社会福祉の運営』有斐閣。
- 古川孝順（2012）「社会福祉原論断章」『社会福祉学』第52巻第4号，92-95。
- 古川孝順（2012）「ソーシャルワークにおける歴史・思想・価値・イデオロギー」『対論 社会福祉学4』中央法規出版。
- 浜口稔（1987）「経験とタブラ・ラサーロック，感覚器官という概念装置」，アルシーブ社編『哲学・思想コーパス事典』日本実業出版社。
- 広井良典（1999）『日本の社会保障』岩波新書。
- 今村仁司（1993）『現代思想の系譜学』ちくま学芸文庫。
- 岩間伸之（2009）「総合的かつ包括的な相談援助を支える理論」『相談援助の基盤と専門職』中央法規出版。190-192。
- 菊池馨実（2001）「社会保障法の理論と課題」『社会保障法』有斐閣アルマ。
- 木原活信（2012）「指定発言」『社会福祉学』第52巻第4号，111-113。
- 空閑浩人（2009）「ソーシャルワークの展開期」『相談援助の基盤と専門職』中央法規出版。
- 孝橋正一（1962）『全訂社会事業の基本問題』ミネルヴァ書房

- 孝橋正一 (1973) 『続社会事業の基本問題』 ミネルヴァ書房.
- 厚東洋輔 (1997) 「メタ福祉学」『日本の社会学 1—社会学理論』 東京大学出版会.
- 小林秀雄 (1961) 『作家の顔』 新潮文庫.
- 松田真一 (1979) 「社会福祉本質論争」真田是編『戦後日本社会福祉論争』 法律文化社.
- 丸岡利則 (2006) 「メタ福祉学の構想Ⅱ」 関西福祉大学研究紀要. 第9号.
- 丸岡利則 (2009) 「メタ福祉学の構想」 関西福祉大学社会福祉研究会編『現代の社会福祉』 日本経済評論社. 42-65頁.
- 丸岡利則 (2012) 「レジデンシャル・ケアの再構成」 高知県立大学紀要. 第61巻.
- 中村和彦 (2012) 「判断能力が不十分な人の『自己決定』をどのように考えるか」 日本社会福祉学会編『対論 社会福祉学 5』 中央法規出版.
- 大澤真幸 (1993) 「第2講 社会秩序はいかにして可能か」『社会学・入門』 宝島社.
- 大澤真幸 (2012) 『近代日本思想の肖像』 講談社学術文庫.
- 大阪社会福祉協議会 (1952) 『大阪社会福祉研究』 創刊号, 第1巻, 第1号, 6頁.
- 岡村重夫 (1956) 「社会福祉における分類概念について (1)」 大阪市大政学部紀要 (社会福祉学 4).
- 岡村重夫 (1983) 『社会福祉原論』 全社協.
- 岡田進一 (2009) 「福祉サービスと援助活動」『現代社会と福祉』 中央法規出版.
- 岡田まり (2002) 「自己決定」黒木保博他『ソーシャルワーク』 中央法規出版.
- 沖蔵智美 (2012) 「『支援つき意思決定の理論』と実際」 日本社会福祉学会編『対論 社会福祉学 5』 中央法規出版.
- 坂田周一 (2000) 『社会福祉政策』 有斐閣アルマ.
- 白澤政和 (1992) 『ケースマネジメントの理論と実際』 中央法規出版.
- 白澤政和 (2011) 『新たな社会福祉学の構築』 中央法規出版.
- 高澤武司 (2000) 『現代福祉システム論』 有斐閣.
- 高田真治 (1995) 「社会福祉の内発的發展の課題と展望—社会福祉思想：二元論から関係論へ—」 関西学院大学社会学部紀要第72号. 101-112.
- 竹田青嗣 (1993a) 『哲学入門』 ちくま学芸文庫.
- 竹田青嗣 (1993b) 『意味とエロス』 ちくま学芸文庫.
- 竹田青嗣 (2004) 『現象学は〈思考の原理〉である』 ちくま新書.
- 武川正吾 (2009) 「社会福祉学におけるカタカナ語の氾濫」『現代社会と福祉』 中央法規出版.
- 富永健一 (1986) 『社会学原理』 岩波書店.
- 内田義彦 (1985) 『読書と社会科学』 岩波新書.
- 横須賀俊二 (2002) 「アドボカシー」 黒木保博他『ソーシャルワーク』 中央法規出版.
- 米本秀仁 (2012) 「社会福祉とソーシャルワークの関係原論」『社会福祉学』 52-4, 107-110.
- David Howe (2009), *A brief Introduction to social work theory*, Palgrave Macmillan. 『ソーシャルワーク入門』 杉本敏夫監訳, (株) みらい.
- Kahn, Alfred J. & Kamerman, Sheila B. (1980) "Social Services in International Perspective"; *The Emergence of the Sixth System*, Transaction Books.